

# 自然における人間を問う

本谷 勲

JWCS 理事（会報掲載時）・東京農工大学名誉教授

地球温暖化をもたらす汚染、野生動植物の急速な消滅といった環境問題が深刻の度合いを深めている。それにつれて環境や自然に対する社会の関心も高まっているが、経済発展重視から環境重視への過渡期の混乱も見受けられる。たとえば、企業、財界、政府などはしきりに「自然との共生」を言いたてている。共生は生態学では英語の *symbiosis* だが、この場合の共生は英語に翻訳すると何と云うのだろうか。あるいはまた、倫理学の研究者のなかには、自然本位の考え方をエコファッショと非難する向きもある。

混乱の一つは、人間と自然の認識にあるようだ。一方に万物の霊長としての人間像があり、他方に自然の産物であり自然の一部である人間像がある。人間と自然とを対立的に捉えるところに、そしてまた、人間本位か自然本位かの二者択一を求めるところに混乱の原因があるように思われる。

この混乱から脱却するために、ここに一つの思考実験を試みようと思うが、読者の皆さんにも実験にお付き合いをお願いしたい。思考実験とは、貴方のルーツを探ることである。貴方は何処から来たか？ を問うことである。両親から生まれた、が正解だが、その両親は誰から生まれたか？ という具合にルーツを徹底して遡っていただきたい。「生物は親（生物）から生まれる」という生物学の公理にしたがって、どこまでもさかのぼるとすれば、どこに行きつくだろうか？ 今のところ人類の祖先型のアウストラロピテクスを想定せざるをえないだろう。しかし、アウストラロピテクスはどこから？ と問い続ければ、チンパンジーなどと共通の霊長類を経て原始霊長類にまでたどりつかざるをえない。問いはここで止まない。

Q：原始霊長類はどこから？

A：哺乳類の祖先型から。

Q：それはどこから？

A：ある種の爬虫類から。

Q：それはどこから？

A：両生類をへて魚類から。

Q：では魚類はどこから？

正確な系統はたどれないとはいえ、結局は生物の起原にまで行きつかざるをえない。余計なことかもしれないが、貴方や私の生命は生物の起原以来連綿として続いてきたことを確認しておきたい。

ここまで思考実験にお付き合いくださった賢明な読者の皆さんは、起原生物はどこから？ と問い続けるに違いない。もはや「生物は親から」の公理は適用できないが、起原生物の前身は？ と問うことはできる。その詳細は化学進化の研究が明示してくれるだろうが、ここでは、生物は非生物物質から作られたことは間違いない、としておこう。したがって、生物（物質）は地球の誕生にまでさかのぼると考えておこう。

すでに宇宙論においては、現在の太陽系の誕生、その前身の恒星の爆発、銀河宇宙の形成など、運動形態はさまざまな姿をとるが、ビッグバンに始まる物質の歴史的な発展こそが、現在の宇宙すなわち自然を形づくっていることを明らかにしている。

自然とはこれらさまざまな運動形態をとる物質の世界であり、それは歴史的に形成されたと考える。そして人間も自然の一部であると言うとき、言葉としてだけでなく、人間にまでつながる生物進化、化学進化等の物質の歴史的な発展を意識することが重要であろう。

ところで、ここに述べたような宇宙の存在、宇宙の構造、宇宙の歴史等を認識しているのは、いまのところ、人間だけである。このことは、自然は人間を生むことによって自然自身を認識したことになる。意識をもつ自然物という意味で人間は特殊な存在であり、人間は自然の失敗作だなどとは言えないことになる。

エンゲルスが「思考する精神」と呼んだ人間の特徴は、しかし、人類ひとりが自力で作ったものではない。直立二足歩行により歩行の労から解放された器用な前肢が物を掴み、石で木の実を割るなどをして、手と腕になる過程で、大脳を発達させたと言われるが、その器用な前肢は、有蹄類の疾走に強い強靱な前肢でもなければ、食肉類の一撃で獲物を倒す強力な前肢でもなく、サルの仲間としての柔軟な前肢であった。まさに霊長類の遺産の手と腕である。眼の立体視も色覚も霊長類の遺産である。

発達した大脳といえども脳せき髄神経系を作り上げた魚類の遺産である。数え上げればきりが無い。すべての動物の遺産の上に人間の存在があると言って過言ではない。野生動物を不必要に消滅させてはならない倫理的な根拠の一つはこの点にあるのではないだろうか。ついでに言えば野生植物を不必要に消滅させてはならない理由は、それらが野生動物の資源だからであろう。

観点をかえよう。上に人間の特殊性を指摘したが、人間とは異なる意味で、クジラは特殊な存在であろう。いや、クジラだけでなく、すべての動物、植物の種はそれぞれの意味において特殊な存在であるに違いない。

しかも生物進化は一つの種を見れば、種特有の進化をとげたが、同時に種は他種とたがいに食う食われる、競争、共生などのさまざまな関係の下で進化したにちがいない。言い

かえれば、生物は絡み合った形で、いわばすべての種が一緒になって、すなわち、生物界として進化したであろう。そうすると、生物界には不要な種は無いことになる。

とすれば、人間の都合で野生の動植物を消滅させるようなことは、生物進化の流れを否定することになる。このような進化・生態学的な理由からしても、野生生物保護の根拠が考えられる。大事なことは生物界の進化・生態学的な正確な内容を人間はまだ十分に明らかにしていないことである。明らかにする前に対象を無くしてしまうということは、自身を認識する自然物である人間の存在を否定することにならないだろうか。

(本稿の基本構想は林 淳一氏)

(JWCS 会報 No.29 2002 年 4 月より転載)